

令和 4 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
一般選抜後期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

国際教養学部 小論文

[設問] 平和な日本と違って、世界にはいまだに紛争・戦争が絶えません。以下の文章は「コソボをめぐる戦争」取材した記者のものです。取材を通して記者は「食」についてどのようなことを学びましたか。また、あなたは「食」についてどのように思うか、600字以内で述べてください。

[資料]

(1行略)

少々古い話になる。1999年、セルビアの自治州だったコソボをめぐる戦争があった。北大西洋条約機構(NATO)の78日間に及ぶ空爆が終わり、同僚記者たちと州都に入った時のことだ。

セルビアの部隊は撤退し、途中まで同行していた英軍部隊はまだ到着していなかった。秩序の守り手を失った州都は銃声が散発し、混乱の極みにあった。

「今晚どこに泊まろう」「へたに動けばスナイパー(狙撃手)に狙われる」

気持ちがささくれ立つ私たちが正気に引き戻したのが、尊敬する先輩記者のひと言である。「まずはご飯を食べて、それから考えませんか」

驚くべきことに、戦火を耐え抜いたホテルの食堂が営業していた。いささか粗末ではあったけれど、温かい食事が凍えきった心をほぐしたのを思い出す。

「食べること」は、単に胃袋を満たすことではない。戦争など「非日常」を生かされる人にとって、「食」という日常のいとなみが、人間としての理性と尊厳を取り戻す手がかりとなる一。

そう教えてくれるのは、セルビアの首都ベオグラード在住の詩人・翻訳家の山崎佳代子さんが4年前に出した著作「パンと野いちご」(勁草書房)である。

様々な民族や宗派が交錯し、対立や戦火が絶えないバルカン半島で、故郷や家を追われた人びとが何を食べ、考えていたのかを山崎さんは聞き書きした。

改めて気づかされるのは、平和がいかにもろく、希少かということだ。昨日までふつうの暮らしをしていたのが、今日は着の身着のまま逃げている。戦争の災禍は突然やってくるものなのだ。

友達と思っていた人が友達でなく、親しくなかった人が仲間だと知る。そこに民族、宗派の別はない。問われているのは個々の人間のありようであって、「〇〇人だから」などと集団でくる危うさもあぶり出す。

そして「食」のなす力である。食材が細っていくなか、家庭で受け継がれてきた料理を工夫をこらして作り、家族や友人と分かち合い、客人をもてなす。

食べること、料理することとは?この問いに、彼らは答える。

「感情。人と人との出会い」「思い出のこと・料理とは甦り(よみがえり)」「正常な気持ちを生みだしてくれる、異常なことが起こっていることに対する抵抗」

料理し、食べることで家族を守り、他者とかかわろうとする「人間としての気高さ、崇高さに、逆にこちらの方が打たれました」。山崎さんはそう話す。

(後略)

(朝日新聞 2022年1月23日『日曜に想う』 沢村亘)